

農学部収穫祭 2007 における学生主体の研究紹介

代表者 小林 美幸 (農学研究科 生物資源利用学専攻 2 年)

1. 目的と概要

農学部収穫祭 2007 において、学生と地域社会との交流を深め、社会的意識を高めるため、学生を主体とした企画により研究室ごとの研究内容の展示や実験デモ等を行う。

11 月 3 日文化の日に農学部収穫祭 2007 は開催され、多くの来場者を迎えることが出来た。参加する研究室の代表学生を『キャンパスボランティア』として募集し、学部長から委嘱状をいただき、収穫祭中ボランティアとして活動した。研究室ごとに研究内容を展示し、来場した人々に説明し、研究室によっては顕微鏡やパソコンを使って説明したり、微生物を使ったヨーグルトを配ったりした。また、バイオディーゼルを作る体験コーナーを設け、実際に来場者の方々が作ったバイオディーゼルを使って機械を動かしたりもした。



バイオディーゼルを作る

2. 実施スケジュール

平成 19 年 11 月 3 日

3. 成果の内容及びその分析・評価等

香川大学農学部キャンパスにおいて文化の日11月3日に収穫祭2007を行い、無事に終了することができた。

この収穫祭2007で学生が主体となって研究内容紹介を行った。今回の学生支援プロジェクト事業によって参加学生を募り、「キャンパスボランティア」として、正式な学部のボランティア活動として学部長から委嘱状を渡していただいた。これにより学部内イベントに関わる立場となり、学生の自主性を高める結果となった。

今回は校舎の大規模な改修工事が行われており、昨年まで利用していた教室や場所が使えなかったため、展示場所の変更を余儀なくされた。しかし、学生が主体となり、研究紹介を行う場所の配置を決め、前日の準備もスムーズに行うことができた。当日も研究室ごとに工夫をした展示をし、地域の



ソーセージ製造体験

方々にわかりやすい説明をすることができた。

学科が別の学生は交流の場がほとんどなかったが、キャンパスボランティア同士で連帯感が生まれ、また、お互い知らなかった研究内容を知ることができ、いい交流の機会となった。また、ボランティアとして学内の案内係の役割もはたした。同時に配ったパンフレットやホットドック・アイスクリーム引換券は足りなくなるほどの盛況だった。来年度以降はもっと準備する必要があるであろう。

同日に幸地区キャンパス、工学部キャンパスでも大学祭が行われていることもあり、参加学生は4回生、院生が中心で低学年の学生の参加は少なかった。研究内容を知り、今後の研究室分属の参考にもなるので農学部の低学年の参加をもっと増やしていけたらいいのではないかと感じた。

4. この事業が本学や地域社会等に与えた影響

学生による研究室紹介を行うことで、地域社会の一般の人々や研究室の違う学生、卒業生などに自分たちが行っている研究活動を広報し、興味をもってもらうことができた。また、地域の人たちが来場し、交流することができた。高校生も多く来場し、農学部に関心をもってもらい、より知ってもらうことができた。さまざまな研究室が参加することによって人づてにこの事業が広まり、大学側と学生が協力して大きなイベントを成功させることができた。



大盛況の留学生のお国自慢料理



毎年恒例餅つき

5. 自分たちの学生生活に与えた影響や効果等

今回のプロジェクト事業によって、学年、研究室の壁を越え、学生や留学生との交流を深めることができた。キャンパスボランティアの各自が自覚をもって与えられた仕事に責任をもって行い、自分たちで同じ目標をもって収穫祭に取り組み、成功させることができた。また、自分たちが行っている研究を専門知識を持たない地域社会の人に説明することで、より自分たちの研究を知り、さらにわかりやすく説明する難しさを知ることができた。



自分たちの作ったヨーグルトの試食



苗の販売

6. 反省点・今後の抱負（計画）・感想等

低学年の参加が少なかったので、低学年でも企画運営できるものを考え、より多くの人に参加できるイベントにしていきたいと感じた。また、まだまだ参加研究室が少なく、チラシ配りなどで人手が足りず、農学部周辺にしか告知できなかった。もっと多くの場所で告知できればもっと多くの人々が来場し、盛り上がると思う。多くの研究室に参加を促していくことが望まれる。さらに、今年はゴミ箱の数が少なく、きちんと分別されずにごみが山積みされていたので、来年度以降整備していく必要がある。予想以上の来場客でパンフレットが足りなくなり、それでも是非欲しいという声も多くあったので部数を増やすべきだろう。

このような事業は学生が積極的に学部イベントの運営に参加できるのでとてもいい機会になったと思う。農学部生が自主的に参加できるイベントであるし、多くの人と交流できる機会でもあるので、来年度以降もこの事業が推進されることを望んでいる。また、農学部以外の学生の参加が少ないのもっと他の学科の学生が参加したり、来場しやすくするともっとよくなるのではないかと感じた。

7. 実施メンバー

代表者 小林 美幸（農学研究科2年）

構成員 三上 雄大（農学研究科1年）

山縣 和紗（農学研究科2年）

丹下 明久（農学研究科1年）

関 崇裕（農学研究科1年）

林 誠（農学研究科1年）

野田 朱花（農学部4年）

中瀬 舞（農学研究科1年）

松沢 智彦（農学部4年）

藤野 紘（農学部4年）

加藤 晋也（農学部4年）

小出 弦太（農学部4年）

齊藤 恵（農学研究科2年）

横井 信敏（農学研究科1年）

山田 祐介（農学研究科2年）

亀井 絵里（農学研究科2年）

中道 和徳（農学部4年）

藤原 利彦（農学部4年）

上田 知幸（農学研究科1年）

長沼 暁生（農学部4年）

村上 絢子（農学部4年）

近藤 揚子（農学部4年）

鬼頭 量平（農学研究科1年）

山本（農学研究科1年）

林 理子（農学部4年）